

メルボルン大会に参加して

横山登志子(公益社団法人日本精神保健福祉士協会会員・札幌学院大学)

今回は、美しい都市と評判の高いメルボルンで、ソーシャルワーク国際定義の改訂がようやく結論をみるという節目の会議に身をおき、そこで何かを感じ取ってきたいという思いから参加してきました。また、共同研究者と一緒に E ポスターでの発表を行いました。会場での個別の(対面的な)やりとりがいったい想定されておらず、面食らったというか、拍子抜けという印象も正直ありましたが、よい経験となりました。研究発表の内容は「当事者研究」という手法がどのように自己理解に役立つのかに関して精神障害者らに調査した結果から、ソーシャルワークを学ぶ学生の演習教育への応用可能性を検討したものです。

国際定義改訂のシンポジウムに参加して考えさせられたことは、多くの場合個人の問題解決や支援から出発するソーシャルワークが、その先にめざす「社会の変革」といった方向性をどう具体的にイメージしていけばいいか、それを教育のなかにどのように取り入れていったらいいかということでした。定義のキーワードは、**Social Change, Social Development, Social Cohesion, Empowerment**などの概念です。これを日本の文化的・社会的・経済的背景のなかでどう理解し、どう行動するのか。そして学生にマイクロ支援から「社会の変革」をどう一連のものとして方法論も含めてイメージさせるのか、当分の間、考えることになりそうです。その際、シンポジウムでも **Human rights approach (education)**と位置づけられていたように、「人権と社会正義」という概念が方向性を示すのだと思います。この概念が「意味と重要性はわかっているけど、なんとなく実感がない、イメージできない」ものになっていないか、あらためて教員の側である筆者自身がこの概念の理解を深めないといけないなと思っています。